

Report

レポート #02

伸びゆく北海道のフットパス

～さらなる発展のために～



小川 巖 (おがわ いわお)

酪農学園大学環境システム学部教授

エコ・ネットワーク代表

1945年松前町生まれ。酪農学園大学環境システム学部教授。野生生物、環境修復等を担当。

はじめに

フットパスはイギリスで歴史を刻んできた歩く道のことである。総延長は20万kmを超すといわれている。イギリスのフットパス事情については、すでに本誌(532号, 2007年)で報告しているので、今回は道内の現状とトレンドについてまとめる。

北海道でフットパスという言葉が用いられたのは、1990年代後半からと思われるが、本格化したのは2000年のはじめからである。そのきっかけとなったのは、北海道新聞野生生物基金の主催によるフットパス・フォーラムなのは間違いない(2002年9月)。翌年から「全道フットパスの集い」が全道フットパス・ネットワーク準備会の主催によって、年1～2回のペースで開催されている。2011年10月の札幌大会まで14回を数える。

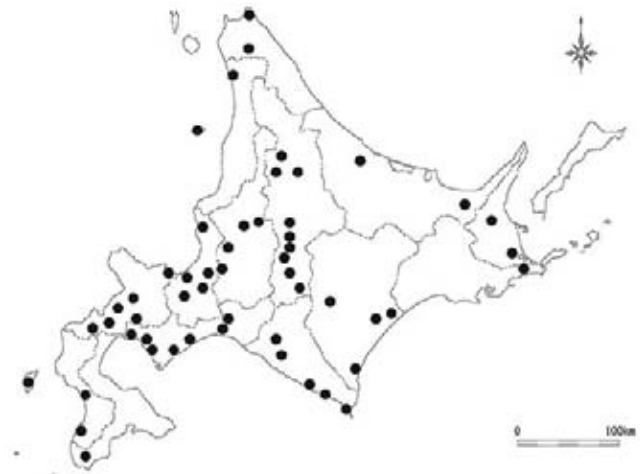
現在、40を超える地域(市町村)に100ルート以上のフットパスが設けられるまでになり、文字どおり全国的にみて、フットパス最先進地と言えるまでになった。

10年間で急成長を遂げたのは確かだが、功の部分だけでなく、課題も浮上してきた。本稿では、北海道におけるフットパスの可能性と課題にスポットを当てることで、さらなる発展に向けたヒントを提供したい。

広がりゆくフットパス

2002年の「フットパス・フォーラム」、2003年からの「全道フットパスの集い」が契機となって、道内各地にフットパスが作られるようになった。それから10年が経過して、濃淡はあるにせよ、全道一円に拡大するまでになった(図1)。渡島、釧路、網走管内で薄く、

図1 道内のフットパス地図



後志（南部）、胆振（東部）、上川、日高、根室の各管内にある程度の集中傾向が認められる。計画、構想中の地域もかなりあるので、今後さらなる増加が見込まれる。今の勢いでいけば遠からず、ほぼ全域に広がるものと期待される。

面的な拡充だけではない。各地のフットパスの特徴と性格が多様なのに気づかされる(表1)。これはフットパスの設定当初から明確でない場合もあり、むしろ後になって意識されるケースも多い。また、単一の性格だけというルートは少数で、大部分は複数の特徴と性格を併せ持っている。

表1 主なフットパスの特徴と性格

代表ルート	性格	農と食	地域振興	観光	自然保護	景観	歴史	交通	健康
チョコシナイ（黒松内町）									
千望峠バス（上富良野町）		○		○		○			
猿留山道（えりも町）		○		○			○	○	
ウヨロ川フットパス（白老町）				○	○				
幌向運河コース（南幌町）		○	○				○	○	
山の辺コース（滝川市・江部乙）		○				○		○	
けもの道バス（平取町）			○						
宗谷丘陵フットパス（稚内市）				○					
歴史と丘の道コース（江差町）				○			○		
根室フットパス（根室市）			○	○	○	○			
旧狩勝線フットパス（新得町）		○	○				○		
太平百合が原フットパス（札幌市北区）								○	○
四十三山コース（洞爺湖町）				○		○			
自然の村・天狗山コース（小樽市）				○		○			
てしお散策コース（天塩町）				○					
青苗岬めぐりコース（奥尻町）				○					
朝日ヶ丘公園バス（富良野市）				○		○			○

※順不同

中でも観光を意識したルートが目立つ。フットパスをきっかけにして、新たな観光客を呼び込みたいという思いが込められているようだ。フットパスを歩いてもらうことで、滞在時間の大幅な延長が実現できるのは確かだが、フットパスを作っただけで観光客が増えるかどうかは疑問である。従来タイプの観光客をターゲットにするのではなく、例えば熊野古道、お遍路のようなウォークツーリズムの開拓が伴わなくてはならないだろう。また、一地域にとどまらず広域にわたるフットパスのネットワークを完成させるのが前提であろう。

「農と食」と「地域振興」の内容はかなりの部分で重複するが、地域資源の活用と創出という点では双方に共通項がある。特に「農と食」に関しては、ルート途中の有機栽培農家に立ち寄り、試食の機会を作るなどして、無理のない農業の理解を図る取り組みが功を奏している例が出ている（南幌町など）。

行政と住民の連携

現在、40を越す市町村でフットパスが取り組まれ100以上のルートが設けられていることは既に述べたとおりである。しかし、自治体がフットパス作りに直接、間接に関わっている例は一部に過ぎず、大部分が住民主体である点にひとつの特徴がある（表2）。実際、行政が主体になっているのは数カ所に過ぎない。また、行政と住民とが、車の両輪のように協働して取り組んでいる例も現れている。このタイプの代表例は、黒松内町と札幌市北区太平百合が原地区であろう。黒松内町では2004年に早くも町民からなるフットパスボランティアを立ち上げ、役場は黒子役に徹した形での運営を今日まで続けている。フットパスの普及を図る上でモデルになるものと考えられる。

表2 フットパスの推進主体

主体	該当地域（市町村）
行政	当別町、西興部村、奥尻町、福島町、洞爺湖町
住民	南幌町、滝川市（江部乙）、江差町
団体等	天塩町、ニセコ町、白老町、稚内市
フットパス団体	新得町、恵庭市、根室市、豊富町
行政・住民連携	黒松内町、えりも町、札幌市北区

※団体等：商工会、観光協会、地域おこし団体、環境保全団体

札幌市北区太平百合が原地区のケースは、札幌市の出先である町づくりセンターと連合町内会が協働して取り組んでいる。都市内における行政と住民による連携を進める上で示唆に富んでいる。他の自治体同様これまで健康の維持・増進の観点から保健衛生部門の主導によりウォーキングが推奨されてきた。ところが、市街地の歩道または公園内をわき目もふらず歩くタイプのウォーキングは、変化に乏しいため飽きが出て、

行き詰まってしまう場合が多い。そこで太平百合が原地区の連合町内会は、地域の景観を活かしたフットパス歩きを思いついた。2009年9月にまずフットパスについての講演会を開催したのを皮切りに、同年11月には地区住民三十数人が参加して暫定コースを歩くことから始めた。翌年もコースを増やし、町民参加の歩くイベントを催すと同時に、太平百合が原フットパスの会を立ち上げ、2011年10月には全道フットパスの集い（第14回）を同地区で開催するまでになった。また、「集い」に併せて16頁からなる「太平百合が原フットパスガイドマップ」を刊行するとともに、数本のルートにコースサインの標識を立てている。

越境ルートとロングトレイル

フットパス作りの主体がどこであれ、まず自治体の中に1本のルートを設けるところからスタートして、それから順次ルートを増やしていくのが一般的である。いずれにしても初期の段階では、ひとつの自治体の中で完結することになる。これがフットパス拡大の第1、2段階である（表3）。

表3 フットパスの発展段階

	内容
第1段階	ひとつの自治体に1ルート
第2段階	ひとつの自治体に数ルート
第3段階	隣接自治体と結ぶルート（越境ルート）
第4段階	広域の自治体が連続してつながるルート（ロングトレイル）
第5段階	全道のフットパスがつながる（全道ネットワーク）

次の第3段階は、隣の自治体をつなぐ越境ルートとなる。この段階の取り組みは意外と少なく、はっきりした形でルート化されているのは、札幌～江別～南幌ルート（約40km）、新得町～南富良野町ルートぐらいではないかとみられるが、今後の増加が見込まれる。

第4段階になると、旧支庁管内の自治体をつなぐロングトレイルになる。中標津町～摩周湖（弟子屈町）までの北根室ランチウェイや網走～釧路を結ぶAKウェイは、まだ全ルート開通には至っていないが、このカテゴリーに属する。



根室の別当場フットパス

現在、ロングトレイル化に向けて最も活発なエリアは旭川・富良野地域である。旭川市を起点に美瑛町、上富良野町、中富良野町、富良野市、南富良野町を経て占冠村に至る約200kmのロングトレイルで、ルートの選定はほぼ完了しているという。旭川市～占冠村のルートと分岐して南富良野町から新得ルートに入り、大雪山を一周する400kmを超えるルートさえ構想されている。

これら以外でもロングトレイル化に向けた動きは各地にある。南後志地域を例に挙げると、倶知安町、ニセコ町、蘭越町、黒松内町、それに真狩村でフットパスが作られている。いずれも第1、2段階であって、隣の自治体と越境ルートでつながれば、一気に4段階に達することになる。もうひとつの例は根室管内である。根室市西部の厚床地区を中心に積極的なフットパスづくりを展開している酪農家集団AB-MOBITが旧標津線の廃線跡を利用するなどしてルートを北へ伸ばせば、別海町のフットパス団体の作るルートとつながる。

このように第1、第2段階から第3段階に進めば、一気に第4段階へ向かうのは必然であろう。さらにその動きが加速すれば、道内全域のフットパス・ネットワーク化が視野に入ってくる。

認定の必要性

これまでは団体・グループなり地元の自治体などが「フットパスを作った」と表明すれば、内容の吟味なしにフットパスとして通用した。すでに道内各地に多数のルートができているとはいえ、実は玉石混交の状態なのである。フットパスづくりの初期の段階であれば、それでも通用したかも知れないが、本格的な段階を迎えようとしている現在、フットパスの定義または基準のようなものを明確にする時期に来ている。

そもそもフットパスとは何か。一口で言えば「歩くに足る道」のことである。より具体的には「自然、歴史、文化、農業などとの触れ合いを楽しむ歩く道」とでもなろうか。山頂なり観光ポイントを目指す登山道やハイキングコースとは別のものと考えらるべきであろう。

利用する側からすると、初めてでも迷わずに歩け、各種の情報をじかに得られることが必須の条件になる。そのためには、一定の基準を満たす必要がある。仮にそれを認定フットパスと呼び、以下の3点を満たすものとする。

- ① フットパスの管理、推進の主体となる組織がある。
- ② ルートの要所に道標、コースサイン等が設けられている。
- ③ ルートマップができている、容易に入手できる。

ではどこが認定すればよいのか。2003年以来、道内フットパスの普及・啓発に当たってきた全道フットパス・ネットワーク準備会が2012年1月から「準備会」が取れ、正式に全道のフットパス団体のまとめ役、調整役、推進役として再出発する運びとなった。この「ネットワーク」が認定の主体になるのがベストであろう。場合によっては日本フットパス協会（2008年設立）との調整も必要になってくる。

フットパスとその特徴、性格等については、別のレポートでやや詳しく紹介しているので、興味のある方は参照願いたい（小川巖，2011年）。

諸課題の解決に向けて

フットパスは道内で急速な増加を続け、この勢いはさらに続くと思われる。一方でさまざまな課題も明らかになってきた。量的拡大のみならず、質的拡充を図る上で諸課題の解決に向けた検討が急務になっている。主な課題を要約すると次のようになる。

- ① 土地所有者との調整
 - ② 全道レベルの推進団体
 - ③ 標識・コースサインの統一
 - ④ 歩きやすい路面
 - ⑤ トイレ
- ① フットパスのルートを設定する上で、どこもぶつかるのが①の問題であろう。土地所有者の理解が得られず、やむなくルートを変更するケースは少なくない。国有地、公有地であれば、フットパス団体が直接、交渉することでたいしては通過の了解が得られるが、私有地だとすんなりいかない例が出てくる。こういうときこそ地元自治体が交渉役を担ってくれるとスムーズに進みやすい。そのためフットパスに対する理解を行政に深めてもらう上で良好な関係構築が欠かせない。
 - ② 2003年以來の準備会を経て2012年から全道フットパス・ネットワークが設立されたことでもあり、各団体・行政との調整、全道マップの作製、コースサイン等の統一、「集い」やフォーラムの開催といった体制は整ったと考える。
 - ③ コースサインについては、すでに完成し、道内10地域ほどで使用されている。退色をしない材質の改善などを進めながら一層の普及を進めていく段階に来ている。
 - ④ フットパスの大半は、既存のさまざまなタイプの道をつないだ形で設定されている。それ故、アスファルト舗装であったり、砂利道であったり、必ずしも



全道統一（予定）のコースサイン

歩く人にとって快適でない道が多く含まれる。一部で施工されているようにチップ舗装にしたり、アスファルト道の一部に土の部分を残すなどの歩きやすい工夫を道路管理者等に働きかけていくべきであろう。

- ⑤ 歩く人にとっての最重要のテーマがトイレといっても過言ではない。スタート・ゴール地点、または中間点でもよいので1カ所は欠かせない。ルート途上にトイレが望めないのならば、コンビニ、公共施設等を組み込んだルート設定があってもよいだろう。もし新設が可能なら環境配慮型のバイオトイレ（おがくず使用タイプがベスト）を設置してはどうだろう。黒松内町のチョコシナイコースの中間点には男女別の本格的バイオトイレが設置されている。



地球環境にやさしいバイオトイレ（黒松内）

まとめ

道内ではこの10年間にフットパスが急速に広がっていき、今後もこの勢いは続くものと思われる。フットパスの持つ特徴・性格も多様で、いくつか併せ持っているケースが大部分を占める。

一方、フットパスをにわかに作ったものの、活動が鈍ったり、そもそも管理・推進の主体が不明確な地域も現れている。今後は量的拡大から質的充実を目指す必要がある。また、未解決なテーマを含む問題点も表面化しつつある。全道フットパス・ネットワークが設立されたことでもあり、これらの諸課題の解決に向けて動き出すものと期待したい。

フットパスを歩いて、ただ汗を流すだけではない。例えば農業・食や健康（癒やし）と結び付けた活動も始まった。スローなフットパス歩きが本格化すれば、大幅な滞在時間の延長が見込まれるため、観光とは異なる形で人の流れができ、フットパスを介した新たな交流が生まれようとしている。

〈参考文献〉

- 小川 巖（2011） フットパスに魅せられて—私のフットパス遍歴—。103頁。エコ・ネットワーク
- 小川 巖（2011） 北海道における地域資源としてのフットパス—その多様性と可能性—。中原准一教授退職記念論文集,67-81。酪農学園大学
- 工藤裕之（2010） 最北の街・稚内に見るフットパスの可能性。季刊北方圏,15: 36-37,56-57。北方圏センター
- 杉川 毅（2010） 北海道の“てっぺん” 稚内のフットパス。モーリー,23: 40-43。北海道新聞野生生物基金
- 泉 留維（2010） 里道が担う共的領域—地域資源としてのフットパスの可能性—。三保 学、菅豊、井上真編著「ローカル・commonsの可能性—自治と環境の新たな関係」。ミネルヴァ書房
- 小川 巖（2010） 地域を元気にする歩く道—フットパス。観光文化,199: 12-16。財日本交通公社
- 小川 巖（2010） 人と地域を元気にするフットパス。「森と健康」ブックレット,Vol.3,17頁。北の森林と健康ネットワーク
- 小川浩一郎（2009） ウェールズのフットパスを歩いて。季刊北方圏,149: 44-47。北方圏センター
- 草苺 健（2008） 森林保養地とフットパス。小林好宏・佐藤郁夫編著「生活見直し型観光とブランド形成—北海道&地域をビジネスする—」,226-250。財北海道開発協会

※2008年以前の文献は本誌532号に収録した。